



Title	女性装者の実践を通じたセクシュアリティの知覚 : 身体の使い方に着目して
Author(s)	二宮, 晃紀
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 7, p. 19-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91174
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

女性装者の実践を通じたセクシュアリティの知覚

—身体の使い方に着目して—

臨床哲学 博士前期課程1年

二宮 晃紀

1.はじめに

近年、国際的な枠組みにおける性的マイノリティの権利保障をもとめるなかで、SOGI(性的指向・ジェンダーアイデンティティ)の概念が提示されている。これは性的指向やジェンダーアイデンティティは全ての人を持ち、各人の中にあるという考えだ。SOGIの概念は当事者の人権という意味で重要な役割を果たしているが、他方、自他の関係性の中で見えてくる性を考えること、換言すれば自己や他者に対してどのように性的なあらわれが知覚されているかを論じることは困難である。そこで本稿では女性装者の身体の使用方を考察することで、他者に知覚されるセクシュアリティこそ我々の生にとって本質的に機能していることを示す。

2.女性装者の身体の使い方

男性の化粧は段々と普及しているとはいえ、近代以降構築された女性と化粧のつながりは強い(石田、2008)。実際、服装においても男女において依然としてデザインや色合いなど十分な差が認められる。だからといって男性がいわゆる女物の服を着て、化粧をし、胸を大きく見せ、体毛を剃るといった簡易な行為だけでは女らしく見えることは難しい。新宿の女性装コミュニティの中で女性装を学んだ三橋順子¹は自身の経験について以下のように語る。

私は、初心者の女装者に女性的なしぐさのコツを聞かれた時、三つの基本に留意するようアドバイスをします。一つは首と背筋をしっかり伸ばし左右の肩甲骨を近づけるように意識すること。

[...] 二つ目は腕の使い方、脇を締めて肘を手首より内側に入れる感を意識すること。[...] 三つ目は足をややハの字に構える(つま先に対して踵をひらく)と楽に膝がつくこと。(三橋、2008、pp.285-286)

他にも三橋は、立ち姿の際の重心の掛け方や座っている際の足の組み方や椅子への上半身の預け方など、女らしい運動を仔細に分析したり先輩の女性装者から聞いたりして、覚えていった。こうした女性装の伝承は女性装コミュニティの中で共有されており、実践者は自らの骨格を理解し、それがどのように見えるかを研究した上で、「女らしく」見える動きを練習し作ってゆく。当然最初は男性として育ち日常の一部になっている身体の使用方を捉え直すため、動きにぎこちなさがあるだろ

¹ 三橋の経験自体が少し古く(1980-2000年)、引用部をストレートに現代の女性装コミュニティあるいは女性装実践者に落とし込むことには慎重でありたい。

うが、日々繰り返し訓練してゆくことを通して女らしい振る舞いを体得してゆく。

また女らしさは四肢を動かすことにとどまらない。同じく女性装の実践者である美島は自分の顔の形を意識的に変えることで女らしい顔つきを「作る」ことができたという。

「私は小鼻が大きいのを気にしています。男は女より鼻が大きい、長さもあるし小鼻も大きいんです。それをカバーするために、頬を少し膨らませて、顔全体のバランスをとるようにしました。頬が大きくなれば、鼻が小さく見えるわけです。男女の顔の輪郭の違いをカバーするために、どこをふくらませて、どこを凹ませたらいいか、自分なりに研究しました。人間の顔なんて粘土細工と一緒に、自由自在です。」(矢島、2005、pp.158-159)

女性の顔の特徴を捉える鋭い観察を踏まえ、男性骨格の顔を持つ美島は我々が普段行うような表情の変化を超えた顔の筋肉の動かし方を身体に落とし込む。他にも発声の仕方や喋り方などに関しても同様のことが言える。

さらに、そうした女としての身体は時として被服を脱いだ性交渉の場ですら演じられる。新宿の女性装コミュニティに属し、男性客を取っていた女性装者である松葉ゆかりは手を筒状にし、潤滑剤を塗ることであたかも膣かのように錯覚させる技術を持っていた(三橋前掲書、2005、p.50)。自らの身体に生まれ持っていない器官を、別のパーツで創作し、錯覚させている。しかしそれは、単に手を筒状にさせるだけでは事足りない。豊胸手術をしていなかった松葉は胸を触ろうとする男性の手をうまくあしらいつつ、下半身へ注意を向けさせたという。胸のなさという男性性を感じさせない工夫なのだ。自らの身体にないパーツを修練と場の雰囲気づくりから仕立て上げる豊かな運動といえる。

3.リズムとしてのセクシュアリティ

熟練した女性装とは女性の動きをそのまま真似するだけではない。前説みたように、ゴツゴツとして頬張った大きな身体に合うよう、女性らしい動きを自らの身体で解釈し表現していく必要がある。

このように現れる女性性はメルロ＝ポンティのいう「リズム」として捉えることができよう。メルロ＝ポンティは「リズム」という比喩表現を用いながら主体と対象の関係の創出を論じている(玉地、本間 2007)。メルロ＝ポンティは「感覚するもの(主体)」と「感覚されるもの(対象)」のように一方からもう一方に意味を与えたり策定したりするような区分の仕方を退ける。あくまで両者は「同期」し「交換」するものだ。つまり知覚は「視覚的・触覚的感覚のモザイクが欲望とか情動、感動など、我々自身の内部経験に結び付けられること」により、「われわれの内部経験から個別に生命的意味を受けとってくる」ことで成立するわけではない(SC 233)。事象の学習によって帰納的にリストを作り、それに当てはめる形で対象を認識する訳ではないのである。この知覚の様式に関して、メルロ＝ポンティ自身も男女の認識という例を示している。そもそも男性的・女性的といった概念は「いわゆる性的行動を超えても認められるような<一般的態度>を含意する豊かな漠然とした」(SC235)ものであって、種々の振る舞いを瞬時に結びつけ、その全体の中に現れる「リズム」を見出すことな

のである。そしてこのリズムは常にわれわれとともに存在しており、何かを知覚することの背後には一般的なリズムがある。そしてある判断をする際、そのリズムが強く表れるのである。つまりある振る舞いに女性的・男性的といった判断を下すことは、男性的・女性的といった一般的リズムがあり、そのリズムに同期してゆくことである。女性装者は生まれ持った身体に即すように自らの動きや装飾に気を配ることで、その身体を女性的なリズムによって下支えされたものへと作り直してゆく。

4. プレゼンテーションされるセクシュアリティ

こうして女性のリズムによって下支えされるセクシュアリティは形質や生まれ持った身体の特徴(骨張った感じや大きさ)を超えて表れる。メルロ=ポンティは『知覚の現象学』において「セクシュアリティは人間の生において、超越されるものでも、無意識的表象によってその核を暴かれるものでもない。それは、雰囲気のように、いつもそこに在る。[…]他の身体領域に比べ特により多くの性を宿している身体領域から、性はあたかも匂いのように、あるいは音のように発散している」(PP278)と述べる。これは、いわゆる生物学的と呼ばれるような、身体の特定の部位(ペニスやヴァギナなど)とセクシュアリティが結びついていることに対する反駁である。我々が何かにセクシュアリティを「感じる」時、それはその対象の全体が纏う「雰囲気」のようなものとして知覚する。ここで言われる「雰囲気」とは知覚の対象の周りに存在する実存的・社会的なものであり、我々の置かれた状況や空間もその「雰囲気」に与する。こうした雰囲気は知覚対象の周りに常に漂っており、メルロ=ポンティは「性と実存のあいだには、相互浸透があるわけであり、つまり、[…]一つの決意なり行為なりを、<性的>だとか<非性的>だとか性格づけることも不可能となる。」(PP279)と考えている。性は我々の生活や人生と絡み合う形で存在しており、言うなればそれらから多分に影響を受ける。(無論、逆に性は我々の生に多分に影響を与えるものである。)換言すれば、セクシュアリティにおける我々の欲望は、我々を生活世界と結びつけるものだ。

こうした見方は現象学に影響を受けたクイア理論家であるゲイル・サラモンに継承されている。

私たちは激しいエロティックな快樂のゾーンを持つが、しかし、身体部位とその魅惑的あるいは性的機能のあいだの関係はおそらく、固く結びついた一対一対応的な符号というよりは、むしろ、緩やかに結びついた共鳴の関係にあるのである。性的表情が性感帯によって「縁どられる」であろう一方で、身体形態は性感帯の位置あるいは振る舞いを規定するのではなく、むしろ、身体形態こそが性感帯によって規定されるのだ。(ゲイル・サラモン、2019、p.80)

性的表情は確かに性感帯と深く関わっている。しかしそれが全てではない。人によっては性器以外の部位やあるいは存在しないパーツからさえも性的なイメージを強く知覚する。たとえば、フェティシズムであったり、トランス女性は自らの身体にないはずの膣が「濡れる」感覚を知覚したりすることがある。こうした身体イメージは社会的(興奮すれば膣が濡れるという情報)なものであ

って、こうした身体知覚すらもサラモンは含んで考えている。

上記のような観点を女性装の実践者の身体の使い方に応用したい。実践者は先述のように女性としての振る舞いを覚え、自らに住ませる。ペニスや喉仏はあるものの、そこに自らの性的な表情を見出さない。むしろ訓練や反復を通して出来上がった女性的な各部分に強いセクシュアリティを見出し、これらが自らの全体的な身体イメージを作り上げる。さらには存在しないはずの器官を他の部位で代替し、「そういうもの」として他者に知覚させることもできる。

極めて高い技術によって作り込まれた女性性によって周囲の人々に女性としてのセクシュアリティを感じさせることができるのは、彼女らの姿態や振る舞いが、性を「雰囲気のように」醸し出すからにほかならない。衣服を纏い街ですれ違うことや細やかな表情に至まで女性性を他者に知覚させる。この高度な営みは単に女性の真似の一言でまとめ上げることは可能とはいえない。同時に人間の性は、いわゆる性自認や性的指向や染色体により決まると判断されるほど単純なものではない。「本当の」性別は何かといったことと同じくらい、主体が周囲の人にどのように表現するかが極めて重要なのである。女性装の実践者の経験において、身体の使い方の中に本質的なセクシュアリティが表れていることがわかるだろう。

文献表

以下の著作については、略号を用いて、その後に参照した邦訳の頁数を表記した

PP: Merleau-Ponty, M.(1945) *Phénoménologie de la perception* (=2015, 中島盛夫訳『叢書 ウニベルシタス 112 知覚の現象学』法政大学出版)

SC: Merleau-Ponty, M.(1942) *La structure du comportement* (=1979, 滝浦静雄・木田元訳『行動の構造』みすず書房)

その他参考文献

石田かおり(2008)『化粧と人間 規格化された身体からの脱出』法政大学出版

三橋順子(2008)『女装と日本人』講談社現代新書

矢島正見編(2006)『戦後日本女装・同性愛研究』中央大学出版部

Salamon, G.(2018) *Assuming Body* (=2019, 藤高和輝訳『身体を引き受けるートランスジェンダーと物質性のレトリック』)